

2001年6月24日

神の裁き エリの悲哀

[聖書]サムエル記上 4章1節～22節

4:1 サムエルの言葉は全イスラエルに及んだ。

◆神の箱、奪われる

4:1 イスラエルはペリシテに向かって出撃し、エベン・エゼルに陣を敷いた。一方、ペリシテ軍はアフエクに陣を敷き、

4:2 イスラエル軍に向かって戦列を整えた。戦いは広がり、イスラエル軍はペリシテ軍に打ち負かされて、この野戦でおよそ四千の兵士が討ち死にした。

4:3 兵士たちが陣営に戻ると、イスラエルの長老たちは言った。「なぜ主は今日、我々がペリシテ軍によって打ち負かされるままにされたのか。主の契約の箱をシロから我々のもとに運んで来よう。そうすれば、主が我々のただ中に来て、敵の手から救ってくださるだろう。」

4:4 兵士たちはシロに人をやって、ケルビムの上に座しておられる万軍の主の契約の箱を、そこから担いで来させた。エリの二人の息子ホフニとピネハスも神の契約の箱に従って来た。

4:5 主の契約の箱が陣営に到着すると、イスラエルの全軍が大歓声をあげたので、地がどよめいた。

4:6 ペリシテ軍は歓声を聞いて言った。「ヘブライ人の陣営にどよめくあの歓声は何だろう。」そして、主の箱がイスラエル軍の陣営に到着したと知ると、

4:7 ペリシテ軍は、神がイスラエル軍の陣営に来たと言ひ合い、恐れて言った。「大変だ。このようなことはついぞなかったことだ。

4:8 大変なことになった。あの強力な神の手から我々を救える者があろうか。あの神は荒れ野でさまざまな災いを与えてエジプトを撃った神だ。

4:9 ペリシテ人よ、雄々しく男らしくあれ。さもなければ、ヘブライ人があなたたちに仕えていたように、あなたたちが彼らに仕えることになる。男らしく彼らと戦え。」

4:10 こうしてペリシテ軍は戦い、イスラエル軍は打ち負かされて、それぞれの天幕に逃げ帰った。打撃は非常に大きく、イスラエルの歩兵三万人が倒れた。

4:11 神の箱は奪われ、エリの二人の息子ホフニとピネハスは死んだ。

4:12 ベニヤミン族の男が一人、戦場を出て走り、その日のうちにシロに着いた。彼の衣は裂け、頭には塵をかぶっていた。

4:13 到着したとき、エリは道の傍らに設けた席に座り、神の箱を気遣って目を凝らしていた。その男が町に知らせをもたらすと、町全体から叫び声があがった。

4:14 エリは叫び声を耳にして、尋ねた。「この騒々しい声は何だ。」男は急いでエリに近寄り報告した。

4:15 エリは九十八歳で目は動かさず、何も見ることができなかった。

4:16 男はエリに言った。「わたしは戦場から戻って来た者です。今日戦場から落ちのびて来ました。」エリは尋ねた。「わが子よ、状況はどうなのか。」

4:17 知らせをもたらした者は答えた。「イスラエル軍はペリシテ軍の前から逃げ去り、兵士の多くが戦死しました。あなたの二人の息子ホフニとピネハスも死に、神の箱は奪われました。」

4:18 その男の報告が神の箱のことに及ぶと、エリは城門のそばの彼の席からあおむけに落ち、首を折って死んだ。年若い、太っていたからである。彼は四十年間、イスラエルのために裁きを行った。

4:19 エリの嫁に当たる、ピネハスの妻は出産間近の身であったが、神の箱が奪われ、しゅうとも夫も死んだとの知らせを聞くと、陣痛に襲われてかがみ込み、子を産んだ。

4:20 死の迫っている彼女に、付き添っていた女たちが語りかけた。「恐れることはありません。男の子が生まれました。」しかし彼女は答えず、心を留めなかった。

4:21 神の箱が奪われ、しゅうとも夫も死に、栄光はイスラエルを去ったと考えて、彼女は子供をイカボド（栄光は失われた）と名付けた。

4:22 彼女は言った。「栄光はイスラエルを去った。神の箱が奪われた。」

[序] 不愉快なメッセージ

日本では小泉首相の支持率が84%でこれはおかしい、危険だとよく言われています。何故こんなに多くの人々が彼を歓迎するのか。今まで政治にうんざりさせられて来た人々が、彼なら期待でき

そうだと思ったからです。自分たちをハッピーな気持ちにしてくれる人物を待っていた、そして彼には人々にそのような期待感を与える何かがあるからなのでしょう。暗く落ち込むような話は聞きたくない、ハッピーな気持ちになりたい——これは私たちの心の中にある基本的な思いの一つです。

札幌の牧師時代に、近所の立派なマンションの住民から「どうしてこんな陰気くさい不吉なパンフレットを家の郵便箱に入れたのか」と大変な剣幕で電話がかかってきました。どなたか熱心なクリスチャンが、信じない者は地獄に行くと言うトラクトを配ったのでした。誰が配っているのかが記されてなかったため、私の教会に抗議がまわってきたのでした。

悪人は地獄に落ちて、閻魔大王に舌を切られ、針の山火の池の拷問でせめられると言う話は、皆が聞かされていて、知らない人はいないのではないのでしょうか。でもお前もそうなるぞと言われると、それでは困るからちゃんとしようとするよりも、そんな不愉快なことをなぜ言うのかと怒る人の方が多いようです。これも、なるべくハッピーな気持ちでいたいと思うからでしょう。

今日は40年間も祭司としてイスラエルの民を指導したエリとその家族が、悲惨な最期を遂げたと言う神さまの裁きを取り上げます。ハッピーな気持ちになりたいと思って教会に来られた方にとっては、あるいは聞きたくない話です。でも大切ですから、途中で席を立たずにお聞きください。

[1] 歴史的な大敗北

サムエル記上の4章は「サムエルの言葉は全イスラエルに及んだ」で始まります。先週語りましたように、少年サムエルに神さまが直接にお語りになった「エリとエリの家を裁きをくだす」という言葉が、イスラエルの全ての人の知るところとなったということでしょう。でもエリは、そんな縁起の悪いことをなぜ言うのかとか、我が家の名誉をひどく傷つけるとはとんでもないと激しく怒り、少年サムエルを叱り飛ばすようなことはしませんでした。「それを話されたのは主だ。主が御目にかなうとおりに行われるように」と実に謙虚に受け止めました。そして息子たちやそばの人に告げたのでやがて話が全イスラエルに及ぶようになったのでしょう。サムエル本人から、育ての親であるエリ先生に神の裁きがかかるという話が広まることなど、あり得なかったと思います。

神さまは全ての人が救われることを心から願っておられます。ですから罪を犯した者をすぐさまお裁きになりません。警告を繰り返し、悔い改める時を与え、それでも聞かない時にやむなく裁きをおくだしになるのです。エリの息子たちは如何だったのでしょうか。残念ながら依然として聞く耳を持たなかったようです。

やがてイスラエルとペリシテとの間に戦争が起こりました。ペリシテの支配下に置かれて武器も持てない状態から抜け出したいと願い、イスラエルは立ち上がったのです。でも最初の戦いで4000人が戦死する敗北を受けました。そこでシロの神殿から神の箱をかつぎだして、前線に迎えて戦うことにしました。

神の箱の中には、モーセの十戒が記された石の板が納められています。律法は神さまがイスラエルの神になってくださる契約として、モーセを通して与えられたものです。神さまはその律法の板を納めた箱のふたの上に臨在しておられると信じられていました。ですから箱を担ぎ出すとは、神さまを担ぎ出そうとしたということになります。

事実、モーセの後を継いだヨシュアがヨルダン川を渡るとき、神の箱を担いだ祭司たちが水の中に足を踏み入れるや、流れが止まり、皆が容易に渡ることが出来ました(ヨシュア3章)。エリコの要塞を落とす時も、城壁の周りを7日間祭司が箱を担いで歩き、最後にときの声をあげると城壁が崩れ落ちました(ヨシュア6章)。

しかしペリシテとの大決戦の時には、効果が無く、打ち負かされてしまったのでした。戦死者3万人、神の箱と共に出陣したエリの二人の息子祭司のホフニとピネハスも殺されてしまいました。エリは神の箱を気遣って町の門の傍らに席を設けて座り、見えない目をこらしていましたが、神の箱が敵に奪われてしまった報告を聞くと、席から仰向けに落ち、首の骨を折って死んでしまいました。98才でした。また出産間じかだった息子ピネハスの妻は、ショックのあまり、男の子を生むと「栄光はイスラエルを去った」と言い残して、死んでしまいました。

そればかりではありません。後の記事から推測して、シロの神殿も破壊されてしまったようです。神の箱は七ヶ月後にペリシテから返されましたが、ダビデ王の代まで、シロにではなく、キルヤトエアリムのアミナダブの家に置かれています。

大祭司と一族が死に、神の箱は奪われ、神殿は破壊され、国は属国になってしまうとは大敗北です。日本にたとえて言えば、天皇と皇太子一族が死に、伊勢神宮が破壊され、三種の神器が奪われ、国が完全に敵の属国にされると言う敗北です。日本の歴史では幸いにして、未だ一度もありませんが、イスラエルの歴史ではもう一度バビロンの捕囚という悲劇が起こっています。まさにイスラエルの栄光は失われてしまったという出来事でした。

[2] 悪を裁く神の支配

40年間も大祭司としてイスラエルの民を指導した98才の老人が、祭司の座からあお向けに落ちて首の骨を折って死んでしまった。後を継いだ二人の息子も敵に殺され、その妻もショックで死んでしまったとは、なんと悲惨な出来事でしょう。神さまが警告通りに厳しい裁きをおくだしになったのだと、聖書は告げています。

仏教徒の間では地獄極楽の話が受け継がれています。一切は無になるという仏教の信仰からすれば、死後に地獄極楽があるという教えは矛盾します。これについてあるお坊さんに質問したところ、実際には存在しないけれども、民衆に対する道徳的教訓として有効なので、一つの方便として用いられているという答えでした。

しかし聖書の信仰では、神の裁きは架空の話ではなく、厳しい現実なのです。悪に対する神の裁きは死と滅びです。不愉快になるから聞きたくないと怒っても、私たち皆が避けて通れない人生の現実なのです。もしそれがおかしいというのなら、悪が善に勝ち、不義が正義を踏みじじる理不尽が、そのまま許されていてよいというのでしょうか。

神さまは罪の不義をお嫌いになり、不義を決してお許しにはならない正義の神さまだ、不義は必ず裁かれるということがはっきりされていて、はじめてこの世界に秩序が成り立つのです。王であろうが大祭司であろうが例外は認められない公平さ——これは正義の基本です。ですからエリもならず者の息子たちの罪を放任した責任を厳しく問われたのでした。

学生は試験やレポートを避けることが出来ません。会社は決算報告をかならず出さなければなりません。試験や決算の無い社会があるでしょうか。そうならば、私たちも神さまから命を与えられて人生を送った者として、どう生きたかを問われるのは当然です。「わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからである」(コリント第二 5:10)。

3月にマタイ13章の毒麦のたとえから、神さまの支配について学びました。悪魔が神の畑であるこの世界に毒麦の種を蒔いて、神の支配を破壊しようとしています。しかし神さまは毒麦をすぐに引き抜こうとされません。刈り入れの時までお待ちになります。悪魔に引き回されている者たちが、悔い改めて立ち帰る時間を与えてくださっているのです。

しかし刈り入れの時は必ずきます。イエスキリストが世の終わりに来て、悪をお裁きになります。「人の子は天使たちを遣わし、つまずきとなるものすべてと、不法を行う者どもを自分の国から集めさせ、燃えさかる炉の中に投げ込ませるのである。——その時、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く。耳のある者は聞きなさい」(13:41~43)。神さまの支配は、最後の審判に向かって進められているのです。神さまの正しい裁きを恐れつつ、正しく生きていこうと励むことこそ、大切なのではないのでしょうか。

私は子どもの時、戦争に出て行く兵隊さんたちを日の丸の旗を振って見送りました。その時必ずこの歌を歌いました。「天に代わりて不義を打つ、忠勇無双の我が兵は、歓呼の声に送られて、いまぞいで立つ父母の国、勝たずば生きて帰らじと、誓う心の勇ましさ」。アメリカとヨーロッパの植民地支配という不義を打ち、アジアを解放する正義の戦いだと、私たちは信じて戦いました。でも正義の戦いの名のもとにここシンガポールでも大勢の市民を虐殺しました。

戦争は両方が正義の旗を振りかざしてぶつかり合います。そして両者とも戦争をしながら不義と邪悪を行います。殺人は恨みと憎しみを生み、次の殺人を惹き起こし、きりがありません。人間が神に代って不義を裁いても、決着がつかないのです。裁きは神さまにお委ねする、そして私たちは皆神さまの裁きに従う——正義は神さまの裁きによってしか確立しないのです。

[3] 父親の悲哀

それにしてもエリともあろう人が、どうしてこのような厳しい神の裁きを受けてしまったのでしょうか。悔い改める時間は十分にありました。ハンナの涙の祈りが聞かれてサムエルが誕生しました。そして幼くしてエリに託されました。そのサムエルが立派に成人してから、戦争が起こり、エリとその一家が破滅する裁きが下ったのです。

サムエルが神殿に預けられた時に、既にエリの息子たちはならず者の祭司であり、神さまの裁きの警告が与えられていました。「神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか」とパウロは言っています。時間は十分に与えられていながら、エリともあろう人が神さまの憐れみを軽んじたのでしょうか。

皆さんはどうお考えになりますか。私もずーっと考えてきました。そして到達した結論を申し上げます。皆さんの考えもお聞きしたいものです。

エリは息子たちを悔い改めさせようと努力したけれども結局導けなかった。神の裁きを免れるためにいろいろ心を砕いたけれども結局だめだったのではないのでしょうか。その根拠はサムエルを通しての神さまの語りかけに、「主が御目にかなうとおりに行われるように」と言っている点です。「当然です。甘んじてお受けします」と裁きを覚悟している様子がうかがえます。

また彼の死に方です。祭司の席は大きくてしっかりしていたでしょう。98才の老人があお向けに落ちるより、前に崩れ落ちる方が自然です。でもそれでは額を打つけれども、首の骨は折れません。渾身の力を振り絞って、後ろに倒れ首の骨を折ったのでしょうか。二人の息子が死んだからではなく、神の箱が奪われたことに祭司として責任をとり、自ら選んだ死に方をしたのです。

父親というものは大きく成人してしまった息子たちに対して、無力です。私はもうどうすることも出来ない父親の悲哀をエリの姿に見て、涙のこぼれる思いがします。世の中にはそのような親たちが沢山居るのではないのでしょうか。西鉄バスをハイジャックして乗客を刺殺した少年の親は、わが子が危険な状態にあることを自覚して、懸命に対処しています。あの時も病院に処置入院させていて、病院側の判断で外出許可が出され、事件が発生してしまいました。この親は全財産をなげうって被害者にお詫びしているそうですね。

とんでもない事件が起こると、「一体親はどんな育て方をしたのだ」と非難の矛先が親に向けられます。そして自殺する親もでてきます。たしかに小さい時の育て方に問題があったに違いありません。でも子どもの幼い時には、どの親も未熟でした。だから自分の手の中に抱え込まずに、教会に連れてきて一緒に育てましょうと私たち夫婦も呼びかけてきました。先週の父の日礼拝でも説教の中でそう申し上げました。

確かにそれは BETTER(まし)な方法でしょう。でもエリは神殿に仕える祭司という家庭環境の中でわが子を育てたのです。人々から非難されるような祭司になってしまい、叱っても聞き流がしてしまう息子どもを毎日見ながら、エリはどんなにつらかったことでしょうか。私たちにも五人の子どもがいます。どの子も爆弾を抱えていて、いつそれが爆発して、子も親も吹っ飛ばかわからないと覚悟して、私は毎日生きています。一生懸命に励んでも自分ではどうすることも出来ない結果に直面させられる事が、人生にはあるのではないのでしょうか。責任をとれといわれてもどうすることもできない、死ぬしかないようなことが、起こる場合があるのではないのでしょうか。子育てについて言えば、これから読んで行きますが、エリだけでなく、サムエルもダビデも失敗しています。そして王として失敗したサウルの方が、素晴らしい息子を持っています。

こう見ていきますと、人生に起こる出来事を人間の責任の追及だけで処理しようとしても解決にはならないことが言えてきます。確かに人間の側の責任もあるけれども、神さまのお考えでこの事が起こった、だからそのまま受け入れていこう、愛の神さまがなされたことならば必ず恵みが添えられているはずだと信じて、更にベストを尽くして生きていこうとする道があると思います。

[結] 神の裁きに委ねる

エリやサムエルでも子育てに失敗しました。完全な人間はいません。みな罪を犯します。しかし神さまは違います。清さにおいても正しさにおいても完全なお方、人間とはまったく違う聖なるお方です。悪と不義を決してお許しにならず、厳しくお裁きになります。この世界を神の裁きをもって御支配なさっておられます。神の憐れみは悔い改める時間をお与えになります。ですから悪が善に勝ち、不義が正義を踏みにじる理不尽がしばしば許されることが起こります。しかし神の裁きは必ず行われます。更にこの歴史はキリストの審判によって終わりとなります。世の終わりにイエスキリストが天からふたたび来られて、既に死んだ者も含めてすべての者をお裁きになります。どのように生きたかを問い、永遠の命にあずかる者と永遠の罰を受ける者とお分けになります。それから新しい天と新しい地がもたらされるのです。

この世界は人間の悪によって自滅してしまうのではありません。同じ事を果てしなく繰り返していくのでもありません。キリストによる最後の審判によって締め括られて、新しい天地がもたらされるのです。これは本当に有難いことではないのでしょうか。

私たちはもっと神さまの裁きを恐れて生きていかなければなりません。と同時に自分ではどうすることも出来ないことについては、神さまに裁きをお委ねして、それを受けいれていく信仰をもって生きていく必要があります。

エリとその家族は神の裁きを受けて悲惨な最期を遂げました。でも預言者サムエルが彼らのもとから生まれました。そしてイスラエルはサムエルを通して大きな祝福を頂きました。裁きを通して恵みを頂くのです。神さまは素晴らしいお方です。 完